

ネタバレは悪くて悪くない

——ネタバレ論争折衷派——

松永伸司

1. イントロ

1.1. 要旨

ネタバレはアリかナシか？ こういう聞き方をすると答えは二派に分かれてしまう。しかし実際には、ネタバレに対する立場はもっと複雑で多様だろう。この意味ではナシ、この意味ではアリ、といった仕方で細かい立場のちがいがあはずだ。

この発表ではまず、いくつかの分類軸にしたがってネタバレのあり方を分類する。そのうえで、それぞれのネタバレのタイプについて、どういう規範的な前提のもとでならそれが悪い（または悪くない）と言いたくなるのかを検討したい。この整理によって、ネタバレに対する立場（アリ派にしろナシ派にしろ）にどのようなバリエーションがありえるのか、またそれぞれの立場の実質的な対立点や一致点がどこにあるのかが浮かび上がってくるだろう。

1.2. 発表の流れ

- **2節**：ネタバレの分類に使う概念を導入する。
- **3節**：ネタバレのタイプを分類する。
- **4節**：どんな意味で悪い／悪くないと言いたくなるかをネタバレタイプ別に検討する。

2. 概念の導入

- **ネタバレ接触**：ある人 X が、ある物語作品 W の内容の少なくとも一部を、 W の正式な鑑賞ではない仕方で新たに知ること。 X が自発的にネタバレ接触する場合もあれば、そうでない場合もある。この場合の X を「ネタバレ接触者」と呼ぶ。「ネタバレ接触」は価値中立的な概念であり、害のあるネタバレ接触もあれば害のないネタバレ接触もある。
- **ネタバレラシ**：ネタバレ接触が、 X とは別の人 Y の行為によって引き起こされる場合、その行為を「ネタバレラシ」と呼ぶ。この場合の Y を「ネタバレラシ者」と呼ぶ。公式のネタバレ情報開示（トレーラーなど）も「ネタバレラシ」に含める。
- **鑑賞経験**：作品の内容をその作品を通して直接に享受する経験。作品の内容を作品外のソース（たとえば伝聞）を通して知るとは、鑑賞経験ではない。
- **本来の鑑賞経験**：ある作品の鑑賞経験のうち、その作品を正しく価値づけるために必要な経

験¹。したがって、ある作品の鑑賞経験には、その作品の本来の鑑賞経験の部分とそうでない鑑賞経験の部分がありえる。

- **おまけの前提：**どんな経験がある作品の本来の鑑賞経験なのか（＝作品の正しい価値づけをするためにどんな鑑賞経験をする必要があるのか）は、わたしたちの鑑賞の実践によって決まる。これは一意に決まる必要はない（何が本来の鑑賞経験であるかについての意見が分かるなら、鑑賞実践が複数あると言えればいいだけ）。

以上は、細かいところで異論がありえるとしても、大まかにはそれほど問題のある定義ではないだろう。

3. ネタバレを分類する

3.1. ネタバレ接触の自発性

まず、ネタバレ接触が自発的になされるかどうかという分類軸がありえる。

- **自発的ネタバレ接触：**ネタバレ接触者が自発的にネタバレ情報に接触する。
- **非自発的ネタバレ接触：**ネタバレ接触者が期せずしてネタバレ情報に接触してしまう。

事前警告を見たうえでネタバレ接触するケースや、ネタバレラシに同意してネタバレ接触するケースは、自発的ネタバレ接触として考えていいだろう。

3.2. ネタバレ情報の開示の仕方

次に、ネタバレ情報がどのようにして開示されるか（＝ネタバレ情報がどのようにしてネタバレ接触者がアクセスできる状態になるか）という分類軸がありえる。

- **意図的ネタバレラシ：**ネタバレ接触者以外の人が、他人にネタバレ接触させることを意図してネタバレ情報を開示する。定義上、公式のネタバレ情報開示（トレーラーなど）も含むが、多くの場合公式のネタバレラシは害あるネタバレラシではない²。
- **非意図的ネタバレラシ：**ネタバレ接触者以外の人が、他人にネタバレ接触させることを意図せずネタバレ情報を開示する。
- **非ネタバレラシ：**ネタバレ接触を誰かのせいでできないケース。たとえば、（自発的かどうかにかかわらず）ネタバレ接触者自身の行動のみによってネタバレ情報へのアクセスが生じるようなケース。

¹ 言い換えれば、〈たとえある作品についての価値言明を行ったとしても、その経験をしていないかぎりには、その言明がその作品の正しい価値づけとして認められない〉というような経験。

² ぶつう公式の情報開示がその作品の本来の鑑賞経験を妨害するとは考えにくい。とはいえ、作品の制作者と宣伝者の間で意思の疎通がうまくいかず、結果的に制作者が意図した本来の鑑賞経験が公式の広告によって損なわれるというケースは考えられる。

ネタバレ接触が自発的かどうかは、ネタバレ情報の開示の仕方とは独立だ。意図的なネタバレシに自発的に接触することもあれば、意図せざるネタバレシに期せずして接触してしまうこともある。

以上の2つの分類軸を掛け合わせることで、次の6タイプができることになる。

- **自発的接触・意図的ネタバレシ**……たとえば、ネタバレ接触者が、自発的にネタバレ情報を人に聞くケースや、「ネタバレしても大丈夫？」と聞かれて同意するケースなど。ネタバレ接触者が自発的に公式トレーラーを見るケースなども含む。
- **自発的接触・非意図的ネタバレシ**……ネタバレ接触者がウェブや SNS などで積極的にネタバレ情報を検索するケースなど。
- **自発的接触・非ネタバレシ**……ネタバレ接触者が自発的に小説の結末部分だけを読むケースなど。
- **非自発的接触・意図的ネタバレシ**……聞いてもいないのに意図的にネタバレ情報を言うてくるやつ。見る気はなかったがたまたまトレーラーを見てしまったケースなども含む。
- **非自発的接触・非意図的ネタバレシ**……SNS などで流れてきたネタバレ情報を見てしまったケースなど。
- **非自発的接触・非ネタバレシ**……たまたま小説の結末部分のページが開いてしまって、話の結末を知ってしまったケースなど。

3.3. 鑑賞経験への影響

さらに、ネタバレ接触がネタバレ接触者の鑑賞経験にどう影響するかという分類軸がありえる。

- **本来の鑑賞経験を妨害する**：そのネタバレ接触のせいで本来の鑑賞経験ができなくなる³。
- **非本来的な鑑賞経験を妨害する**：そのネタバレ接触のせいで本来の鑑賞経験ができなくなることはないものの、なんらかの特定の鑑賞経験ができなくなる。
- **鑑賞経験を妨害しない**：そのネタバレ接触によって鑑賞経験が変わることはない。

この分類軸を先の6タイプと掛け合わせることで、 $6 \times 3 = 18$ タイプができることになる。

³ 正確に言えば、ネタバレ接触のせいで特定の鑑賞経験が「できなくなる」というよりは、「しづらくなる」と言ったほうがよい。そしてその「しづらさ」にはさまざまな程度がありえる。以下煩雑さを避けるために「鑑賞経験ができなくなる」という言い方を使うことがあるが、すべて「鑑賞経験が相対的にしづらくなる」と言い換えるのが正しい。

ネタバレ分類表

No.	ネタバレ接触の自発性	ネタバレ情報の開示方法	鑑賞経験への影響
1	自発的ネタバレ接触	意図的ネタバラシ	本来の鑑賞経験を妨害する
2	自発的ネタバレ接触	意図的ネタバラシ	非本来的な鑑賞経験を妨害する
3	自発的ネタバレ接触	意図的ネタバラシ	鑑賞経験を妨害しない
4	自発的ネタバレ接触	非意図的ネタバラシ	本来の鑑賞経験を妨害する
5	自発的ネタバレ接触	非意図的ネタバラシ	非本来的な鑑賞経験を妨害する
6	自発的ネタバレ接触	非意図的ネタバラシ	鑑賞経験を妨害しない
7	自発的ネタバレ接触	非ネタバラシ	本来的な鑑賞経験を妨害する
8	自発的ネタバレ接触	非ネタバラシ	非本来的な鑑賞経験を妨害する
9	自発的ネタバレ接触	非ネタバラシ	鑑賞経験を妨害しない
10	非自発的ネタバレ接触	意図的ネタバラシ	本来の鑑賞経験を妨害する
11	非自発的ネタバレ接触	意図的ネタバラシ	非本来的な鑑賞経験を妨害する
12	非自発的ネタバレ接触	意図的ネタバラシ	鑑賞経験を妨害しない
13	非自発的ネタバレ接触	非意図的ネタバラシ	本来の鑑賞経験を妨害する
14	非自発的ネタバレ接触	非意図的ネタバラシ	非本来的な鑑賞経験を妨害する
15	非自発的ネタバレ接触	非意図的ネタバラシ	鑑賞経験を妨害しない
16	非自発的ネタバレ接触	非ネタバラシ	本来の鑑賞経験を妨害する
17	非自発的ネタバレ接触	非ネタバラシ	非本来的な鑑賞経験を妨害する
18	非自発的ネタバレ接触	非ネタバラシ	鑑賞経験を妨害しない

4. ネットバレのなにが悪いのか

この分類をベースにして、それぞれのタイプのネタバレが悪いのかどうか、悪いとすればどんな点で悪いのかを検討しよう⁴。すべてのタイプを細かく検討することはできないので、とくにネタバレ論争における見解の一致や対立がわかりやすく出ると思われるタイプを取り上げる。

4.1. ネットバラシはどのように悪いのか

高田発表が示すように、ネタバレ接触がしばしばある種の鑑賞経験を妨害するという事実は否定できない。そしてミステリーやサスペンスといった謎や先行きの不確定さを重視するジャンルでは、ネタバレ接触で妨害されるのが本来の鑑賞経験であることもよくあるだろう。

意図的であろうがなかろうが、非自発的ネタバレ接触をもたらすネタバレシは、しばしば本来の鑑賞経験を妨害する（10、13）。しかし、ネタバレシが嫌がられるのは、本来の鑑賞経験を妨害するものにかぎった話ではない。ネタバレシ者が、いかに本来の鑑賞経験に関わるネタバレ情報を避けてネタバレシをしたとしても、嫌がる人は嫌がるのだ（たとえば、高田発表の『オリエン特急行の殺人』の例示ですら、嫌がる人はいるかもしれない）。

本来の鑑賞経験を妨害するかどうかにかかわらず、ネタバレシ一般（10～15）が悪いように思えるとすれば、次のような規範が背後にあるからだと思われる⁵。

- **美的自由の規範:** わたしたちには、自分自身が好む仕方での作品の鑑賞条件を設定する自由がある。この自由は守られなければならない。

作品を鑑賞するまえに、作品の内容についてどれだけの情報を集めるか／集めないかは、それぞれの鑑賞者が自由に選択できるようにしなければならない。あらゆるネタバレシはその自由を少なくとも部分的に制限する。したがってネタバレシは悪い、というわけだ。

美的自由の規範は、いかなる鑑賞経験も妨害しないタイプのネタバレシ（12、15）に対しても有効だ。ネタバレシ者の発言が作品の内容についてのものであることがわかるかぎり、ネタバレシ接触者は、作品の鑑賞時にその発言内容を気にしながら鑑賞するようになってしまう可能性がある。たとえば、渡辺発表が示すように、ネタバレシ接触者は、ネタバレ情報の真偽を確かめるという態度で鑑賞することになるかもしれない。意図的ネタバレシの場合は、鑑賞態度への影響がとりわけ大きいかもしれない。たとえネタバレシ者が重要なネタバレ情報を避けていたとし

⁴ 高田発表にもあるように、ネタバレの「悪さ」と言ったときに、ネタバレ情報がネタバレ接触者に害を与えるという意味での悪さと、ネタバレ接触者またはネタバレシ者の行為が不正であるという意味での悪さがある。悪いネタバレシ行為や悪い自発的ネタバレシ接触行為は、多くの場合ネタバレシ接触者に害を与えるという意味で悪いわけだが、その場合でも害と不正は明確に区別すべきである。とはいえ、文脈上混同するおそれがとくにない場合は、煩雑さを避けるために害も不正も「悪さ」と呼ぶことにする。

⁵ 「嫌がる人を嫌がらせているから悪い」という理屈はストレートには成り立たないように思われる。歯医者に行くのを嫌がる子どもを強制的に歯医者に連れて行くのは、嫌がる人を嫌がらせることではあるが、だからといって悪いとは言えない。もちろん、嫌がらせの害を相殺する福利（虫歯の治療）があるという説明はできるかもしれない。

でも、その言い回し、表情、重要な情報を避けているというまさにその配慮、そうしたすべてのふるまいがネタバレを聞く人の鑑賞態度に大きく影響をあたえうる。

いずれにせよ任意のネタバレは、それがネタバレであることがわかるかぎり、ネタバレ接触者の鑑賞態度に影響を与える可能性がある。これもまた美的自由の侵害のひとつのあり方だ。

4.2. 自発的ネタバレ接触は悪いのか

次に、自発的ネタバレ接触のタイプ(1~9)を考えよう(ネタバレによって引き起こされるかどうかは問わない)。美的自由の規範に照らすかぎり、このタイプのネタバレに悪さはないはずだ。このタイプでは、美的自由はとくに侵害されていないからだ。したがって、もしこのタイプになんらかの悪さがあるように思えるのだとすれば、美的自由とは別の規範が背後にあるということになる。

本来の鑑賞経験を妨害する自発的ネタバレ接触のタイプ(1、4、7)には、ある種の悪さがあると言いたくなるかもしれない。このタイプに当てはまるのは、たとえば次のようなケースだ。

A はミステリー作品 M を鑑賞しようとしていたが、なんらかの理由⁶で自発的に M のネタバレ情報に接し、鑑賞するまえにトリックや結末をおおむね把握してしまった。その結果、実際に M を鑑賞したときに、見どころでとくに楽しめなかった。

森発表が取り上げているのはまさにこのタイプだ。森発表の主要な主張(①作者に失礼、②文化を腐敗させる)はさておき、おそらくその議論の前提になっている「わたしたちはできるだけ本来の鑑賞経験をなるべく努力すべきである」という**美的努力の規範**⁷は、それなりに広く受け入れられるものと思われる。そして、その規範にしたがうかぎりでは、本来の鑑賞経験を妨害する自発的ネタバレ接触(1、4、7)はたしかによろしくないだろう。

問題は、この美的努力の規範が、美的自由の規範としばしば対立するという点にある。たとえ本来の鑑賞経験をできなくするようなネタバレ接触であっても、自発的になされるかぎり、それは美的自由の規範によって保証されている。鑑賞の質が落ちようが変な鑑賞の仕方であろうが、鑑賞者の勝手だろうというわけだ。

森発表の「ネタバレ許容派の自己弁護 1」と「4」に示されているように、この対立をどう解消すべきかについては議論があるかもしれない⁸。とはいえ、ここでは、美的自由の規範は、一方ではネタバレを糾弾するためにも使えるが、他方では自発的ネタバレ接触を擁護するために

⁶ 高田発表では、ありえる理由として「鑑賞の補助」や「情動の抑制」が挙げられている。

⁷ これは、美的義務の話かもしれないし、美的能力の涵養の規範(理想的鑑賞者を目指すべし、美的に徳ある人になるべし)の話かもしれない。いずれにせよ、わたしたちの美的伝統では、この種の規範がたびたび顔を出す。

⁸ 個人的には、この対立は属している鑑賞実践がちがうという以上ものではなく、とくに解消すべきようなものではないと思う。この件については、一方の実践の存在が他方の実践を脅かすという関係もないため、後述するようなゾーニングの必要性もないだろう。

も使えるということを指摘するにとどめる。

4.3. 本来の鑑賞経験のずれ

美的努力の規範には、もうひとつ別の問題がある。本来の鑑賞経験が何であるかについての考えが人によってちがう可能性があるのだ。ミステリーなどの確立したジャンルについては本来の鑑賞経験に必要な要素とそうでない要素の線引きはそれなりに共有されているだろうが、そうでない作品も数多くあるだろう。

結果的に、美的努力の規範を受け入れている人同士であっても、どんなネタバレ情報なら問題ないかについての考えがちがうということがありえる。次のようなケースを考えよう。

B はサイコサスペンス映画作品 S のポイントは最後のどんでん返しに驚くことだと思っている。それゆえ、結末についてのネタバレ情報を人に伝えることは、その人の本来の鑑賞経験を妨害してしまうことだと考えている。一方、C は S を含めたあらゆる映画作品の見どころはその映像的な演出や演技や脚本のうまさにあると思っている。C の考えによると、作品の内容を鑑賞前に知ったとしても、脚本のうまさ（どんでん返しであろうがなかろうが）を含めた映画作品の見どころを鑑賞することの妨げにはならない。

さて、B と C がいるところに、ちょうど S をこれから見ようとしている（まだ見ていない）D がやってきて、S の内容を聞いてきた。

B と C はどちらも美的努力の規範を受け入れているとしよう。しかし、D に対して B と C がとる態度は、異なるものになりえる。B はストーリーにはできるだけ触れないでおくだろうが（なぜなら D がどんでん返しを察してしまったら台無しだから）、C は鑑賞の際に注目すべきポイントに言及するかもしれないし、下手をすればストーリーの詳細に言及するかもしれない。

ここで B は、D が自発的に S のストーリーを知ることが美的努力の規範に即して悪いと考えており、C は同じことが美的努力の規範に即して悪くないと考えている。そういうわけで、美的努力の規範のもとであっても、自発的ネタバレ接触のケースに対して立場のちがいがありえる⁹。

4.4. 非意図的ネタバレシとゾーニング

本来の鑑賞経験を妨害する非自発的ネタバレ接触を引き起こす意図的ネタバレシ (10) は、ようするに意地悪であり、禁止すべきレベルで悪いと言えるかもしれない。一方、非意図的ネタバレシ (4~6、13~15) は、そこまで悪いことなのだろうか。すでに述べたように、それはたしかに他人の美的自由を侵害しうるものだ。また、場合によっては、本来の鑑賞経験を妨害する非自

⁹ もちろん、非自発的ネタバレ接触の場合は、たとえ美的努力の規範にしたがっていたとしても、美的自由の規範の点で非難されうる（美的努力の規範は認めるが美的自由の規範は認めないという立場はかなりパターンリスティックだ）。ちなみに、本来の鑑賞経験を妨害する非自発的ネタバレ接触を引き起こすネタバレシ (10、13) は、どちらの規範にも違反しており、すごく悪い。それを意図的に引き起こしているタイプ 10 は邪悪であり、意図せず引き起こしているタイプ 13 は過失である。そして誰のせいにもできないが、同じ事態を引き起こすタイプ 16 は災難である。

発的ネタバレ接触を引き起こしうる。

しかしそれでも、非意図的ネタバレは、以下の規範（おそらく広く受け入れられているであろう規範）によって擁護される。

- **作品語りの自由の規範**：批評的言説（作品についての感想のやりとりなどを含む）を公開する自由は守られなければならない。というのも、美的文化の健全さは、自由な批評的言説を許容することで維持されるからだ。

非意図的ネタバレを禁止してしまうと、作品を鑑賞した人がそれについて自由に語るということができなくなってしまう。これは当然ながら、文化の腐敗と衰退を招くだろう。作品の価値づけ（とりわけ理由にもとづいた価値づけ）とその共有こそ、美的文化をそれとして成り立たせているものだろうからだ。

もちろん、だからといって無条件に非意図的ネタバレを許容すべきということにはならない。現実的な問題としては、非自発的ネタバレ接触を引き起こす非意図的ネタバレ（13～15）をいかに減らすか¹⁰、そしてそのためにネタバレ情報の開示に対してどのような条件を課すかという話になると思われる。これはゾーニング一般の課題と同じだ。

ネタバレ警告は、すでになされているゾーニングの実践と見なせるだろう。それ以上にどんなゾーニングが必要なのか（あるいは不要なのか）については、議論があってしかるべきだと思う。

4.5. おまけ：無垢の鑑賞の誤謬

次のような考えがある（森発表「ネタバレ許容派の自己弁護 2」の議論も参照）。

- **無垢の鑑賞テーゼ**：ネタバレ接触は、「まっさらな状態での初めて作品鑑賞」という一度きりの大事な鑑賞の可能性を台無しにしてしまう（したがってよろしくない）。

ようするに、「初回」は一度きりしかないのでネタバレ接触によって汚すのはやめましょう、という話だ。しかし、それでいうと「まだ一度も見ていない状態でネタバレ接触をしたうえで初めて鑑賞する」という経験も一度きりしかありえない。ネタバレ接触をせずに初回鑑賞した鑑賞者は、この「鑑賞まえにネタバレをくらったうえで初回鑑賞する」という（たぶん大事な）経験をしていないし、永久にすることができない。

それゆえ、たんに一度きりの経験であるということは、ネタバレ接触ぬきの初回鑑賞のアドバンテージにはならない。ネタバレ接触ぬきの初回鑑賞の重要性を主張するのなら、一度きりであるのとは別の根拠を持ち出す必要がある。あらゆる経験は初めてであり、一度きりであり、その意味で無垢なのだ。

¹⁰ あるいは逆に、インターネットや SNS によってそうした不幸なケースが増えてきたことでネタバレが問題になっているのかもしれない。